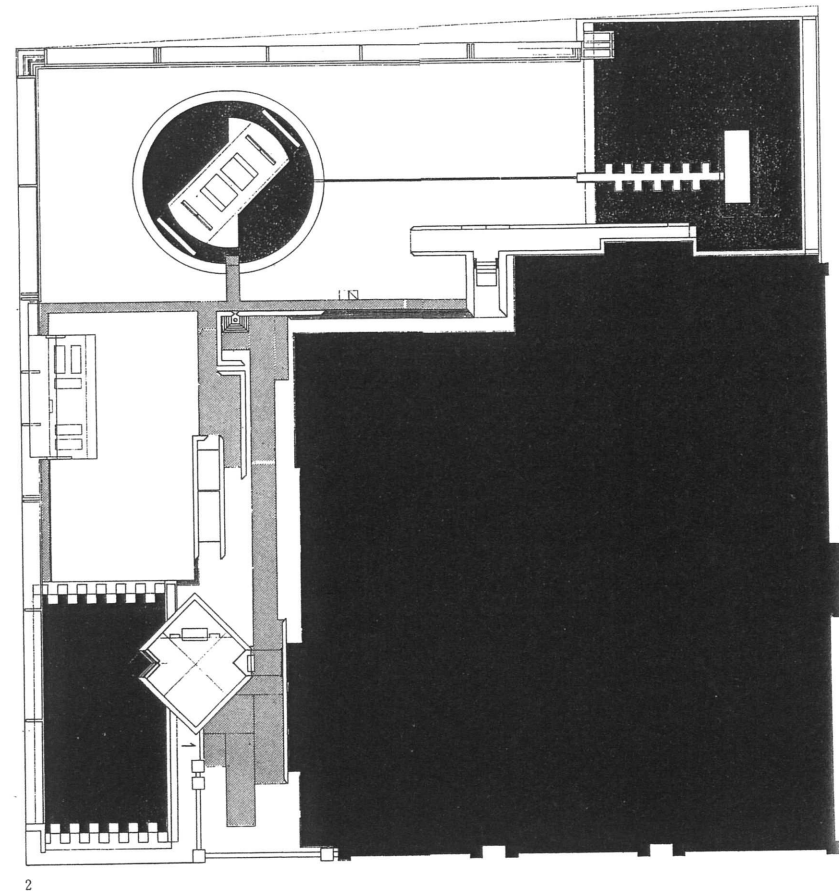


図2-図6：建築確認申請用一般図。プリオン家墓地の設計は、1969年に故ジュゼッペ・プリオンの夫人オノリーナ・プリオンの依頼によって始められた。敷地は故人の生地である村の共同墓地の一角に求められようとした。当初は共同墓地の中でも最も奥まった北東隅の一角68㎡があたえられることになったが、その後地権者など諸般の事情により、墓地の北東をぐるりと取り囲むような約2200㎡もの広大な敷地が取得され（1969年5月）、未曾有の規模の墓地が建設されることになった。この時点でスカルパは組積造から鉄筋コンクリート打放しとすることに決めた。この図は1970年3月アルティヴォーレ町当局により承認されたものである。この段階に至るまでの実質的な設計期間はおよそ半年と見られるが、完成度は極めて高く、全体の配置はほぼそのまま踏襲され、実現にこぎつけられているばかりでなく、個々の建物のデザインにしても概ね骨格は変更されることなく実施されている。計画の規模、複雑さ、そして何よりもスカルパの目頃の設計のスピードを考えたとき、この計画における設計の初期段階のスピードと綿密さは驚異的である。スカルパがいかにこの計画に心身ともに没入していたかが知れよう。

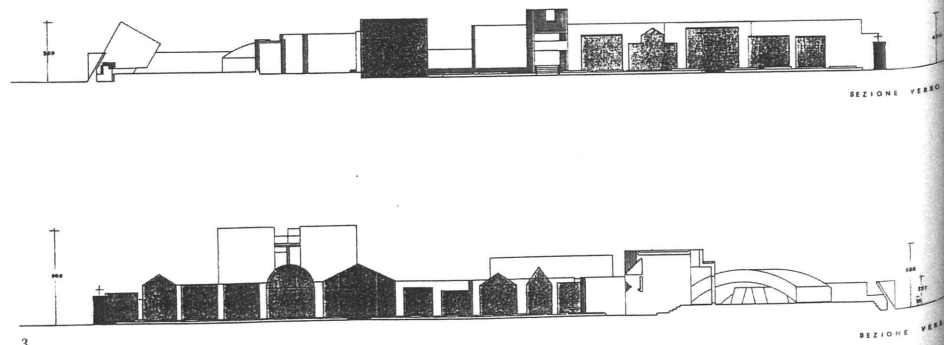
設計はこの図に見られる全体の骨格を尊重しながらも、細部に入り込んでまた全体に立ち戻るといふ具合に、行きつ戻りつをどこまでも繰り返しながら、1978年の不慮の死に至るまで続けられた。スカルパが細心の注意を払っているのは共同墓地全体との景観の調和であり、そこの中の墓廟との調和的共存である。プリオン家墓地の建造物が高さ、大きさ、形態のどれにおいても突出したものにならないように、配慮している。規模こそ段違いに大きいとはいえ、しかしプリオン家が共同墓地を支配するような関係を形象化することを徹頭徹尾避けたのである。

申請段階のこの案が実現案と違う点のひとつは、チャペル側の入口（画面下方）の脇に大きな池が配されていることで、実際には池は狭められ、修道士たちの墓の設置場所となる糸杉の庭が作られた。糸杉は墓地にはつきものであり、実際、共同墓地に至る道の両側には糸杉の並木があり、そのイメージをここで再現したともいえる。

プリオン夫妻の墓は、死者は大地に帰すという古来の伝統に則り、やや高くされた大地に窪みを作り、その上に安置された。それはスカルパ自身の墓がそうであったように、彼の理想とするところであった。現代のイタリアでは土地事情によるとはいえ、墓地はまるで立体ウサギ小屋ようになってしまっている。スカルパは同時期にロッジが手がけることになったモデナ市の墓地の設計依頼を受けたこともあったが、結局はウサギ小屋しか作れないことの必然性を見据えて断ったといういきさつがある。



2



3

2-6：1970年3月アルティヴォーレ町当局によって承認された図面 1:600 (掲載時)  
March 1970, project approved by the Altivole town council

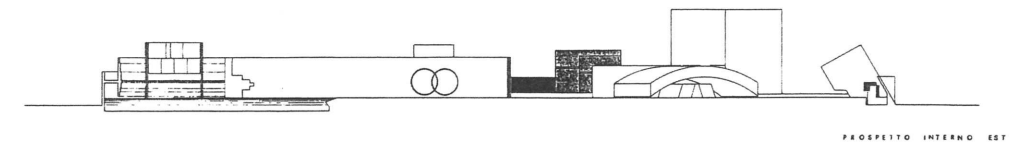
2：平面図  
Plan 1:150  
Black ink and color films on heavyweight tracing paper

3：東、北断面図  
East and north sections 1:150  
Black ink and color films on heavyweight tracing paper

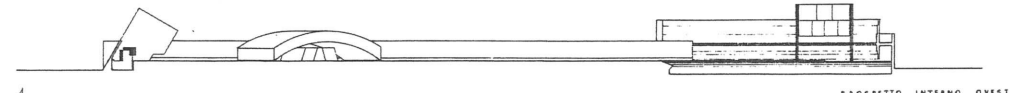
4：東、西立面図（墓地内側）  
East and west interior elevations 1:150  
Black ink and color films on heavyweight tracing paper

5：北、南立面図（墓地内側）  
North and south interior elevations 1:150  
Black ink and color films on heavyweight tracing paper

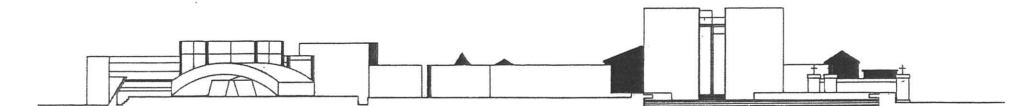
6：西、北、東立面図（墓地外側）  
West, north and east exterior elevations 1:150  
Black ink and color films on heavyweight tracing paper



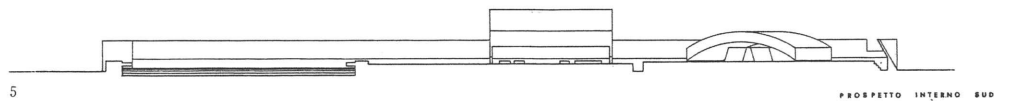
PROSPETTO INTERNO EST



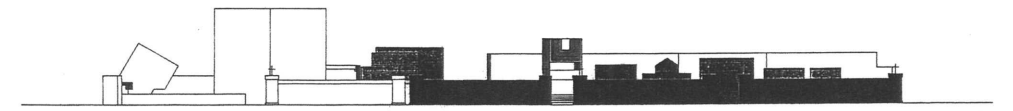
PROSPETTO INTERNO OVEST



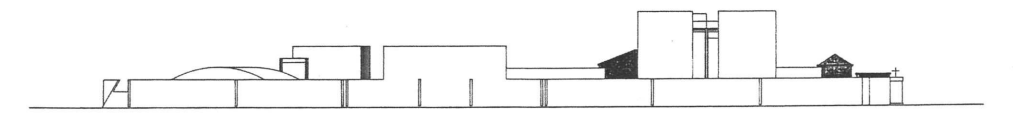
PROSPETTO INTERNO NORD



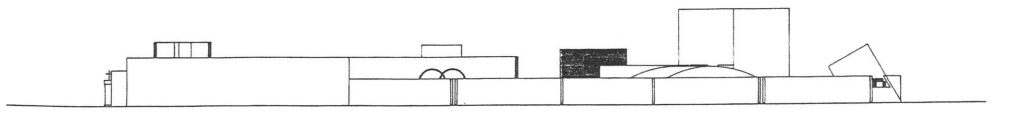
PROSPETTO INTERNO OVEST



PROSPETTO ESTERNO OVEST



PROSPETTO ESTERNO NORD



PROSPETTO ESTERNO EST

6

図7：全体配置図。各領域の区分が非常に明瞭でありながら、それらは複雑に絡み合い、意外なシーンの連続する迷路のような空間を現出させる。そしてそれらを結合する働きをしているのが生命の象徴としての水である。すなわち、池からわき出した水は一直線に緑の平原を横切り、ブリオン夫妻の墓に達し、浅い水溜まりを作り、さらにそこからチャペルの入口、チャペル裏の池へと至る。瞑想の場所(池)、夫妻の眠る場所、儀式の場所。いずれにおいても水が回りを取り囲み、保護し、神聖化している。こうした絶えることのない水の循環は当初よりイメージされ、技術上の問題などから変更、改善を加えられながら最後まで保たれた。  
パビリオンのある池(緑の平原から直接行けるようになっている)、パビリオンの入口まわりや裏の大きな池など、部分的には過渡的な段階にある案。

図8：1971年から72年にかけて、共同墓地の南側への拡張計画の平面。墓地内の比較的大きな墓廟のボリュームが描かれ、それらとブリオン家墓地内の建造物のボリュームの大きさが比較検討されている。

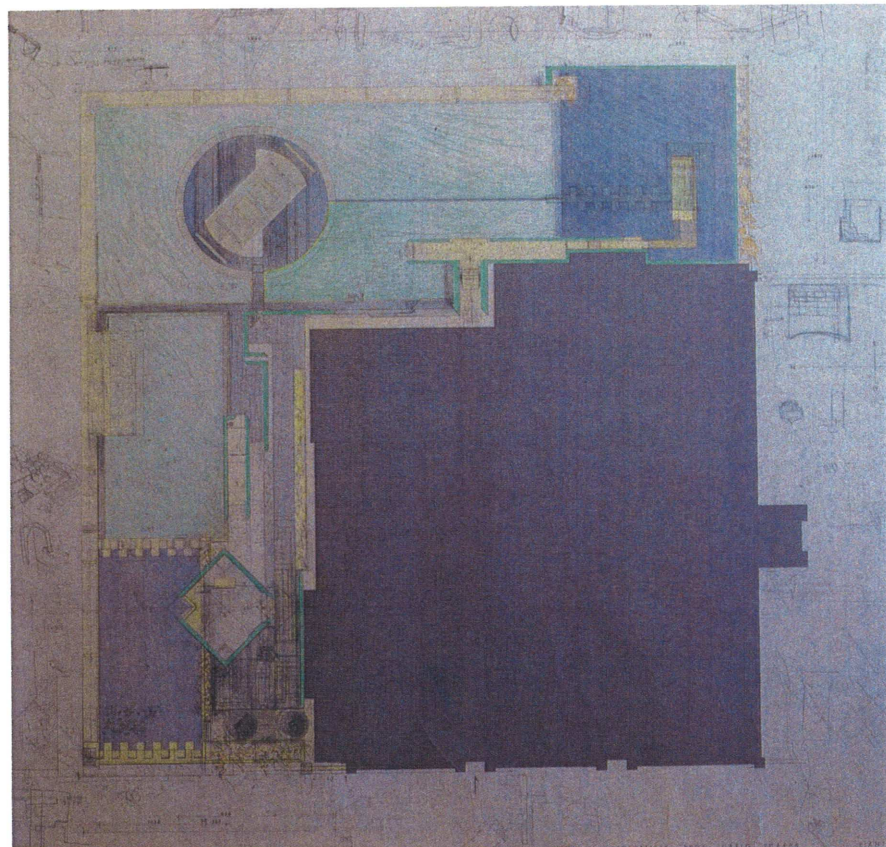
図9：ことに池の領域がスタディされている。ここでは既に緑の草原から池を渡って直接パビリオンに行くアプローチは消滅している。水は池から入口棟の脇を細い水路を通してすり抜け、夫妻の墓に達している。実現案に近い。

図10：1971年から72年にかけての共同墓地の拡張計画に際しての、外周を巡る塀の立面スケッチ。糸杉が高く聳える。共同墓地とブリオン家墓地の景観の連続性がスタディされている。また共同墓地の入口から見えるブリオン家墓地の入口の見え方もスタディされている。およそ200mばかり続く糸杉の並木を進んで行くと、真正面の絶好の位置にブリオン家墓の入口が見えてくる。

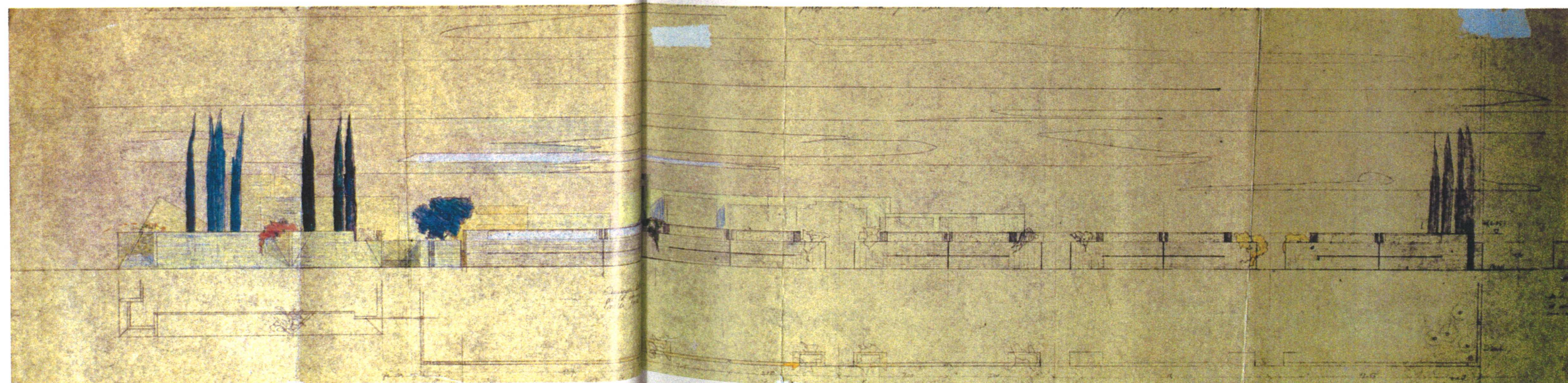
なおここに掲載された図面は以下に記したものを除き縮小されて印刷されているが、縮小率は一定ではない。図面の英文キャプションにある縮尺は原図の描かれている縮尺である。

図43、46、65、66

また写真複写を原則としているが、原図の状態と比較した上で原図からのコピーを用いたものもある。  
図1、2、3、4、5、6、41、42、43、45、46、47、48、50、51、78、81



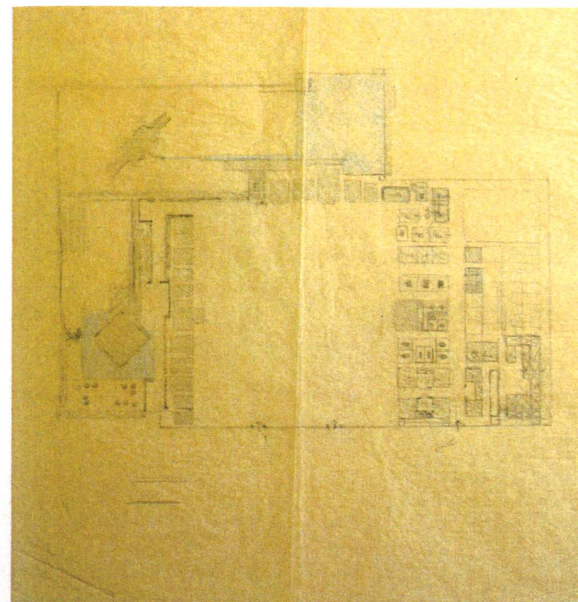
7



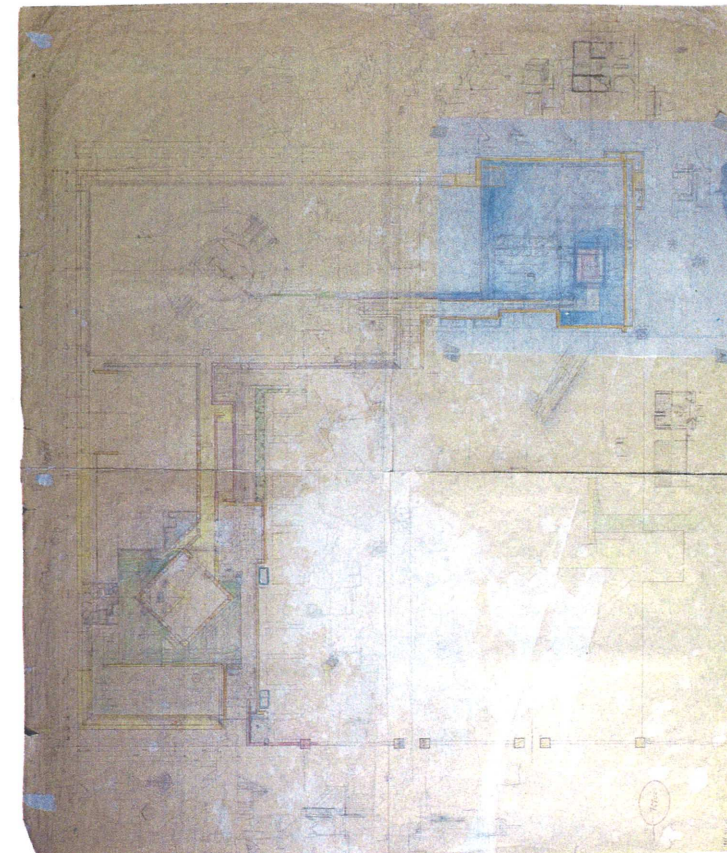
10

7：平面図  
Plan 1:150  
Graphite pencil and color pencil on blue print  
8：平面図(共同墓地拡張計画)  
Layout plan 1:250  
Graphite pencil and color pencil on yellow tracing paper  
9：平面図  
Plan 1:100  
Graphite pencil and color pencil on blue print with tracing paper

10：西立面、平面図(共同墓地拡張計画)  
West elevation and plan of the enclosing wall,  
February 10, 1972 1:100  
Color pencil on blue print



8



9

図面：入口棟

Drawings: Propylon and Corridor

図11：池から入口棟方向を見る。池の縁、入口棟の両端部、上部に突出したところなど、スカルパの関心が常にエッジに集まっていたことが知られる。

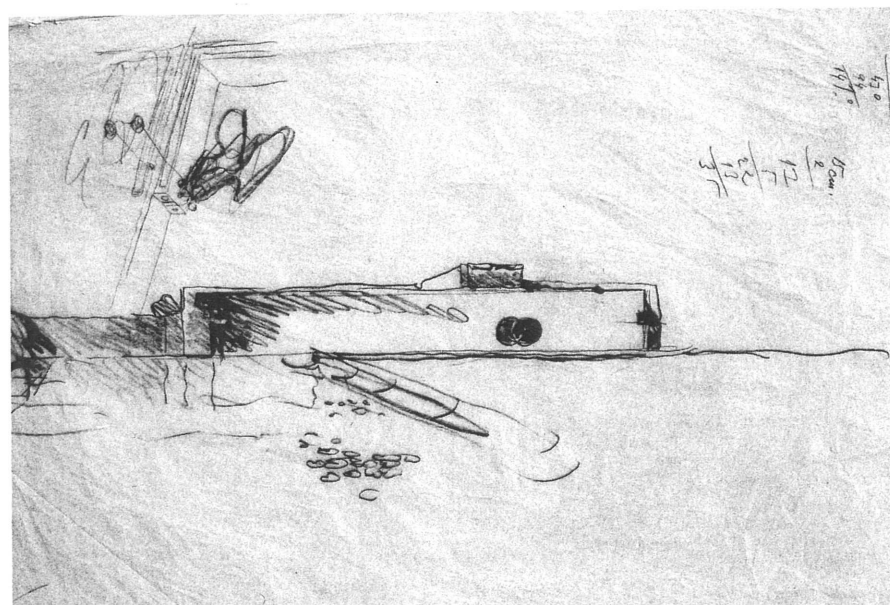


図12：入口棟の床のスタディ。プレキャスト・コンクリート、目地は鉄材(黒く描かれている)。右上方の飛び出したところからアプローチし、左右に直角に別れて、一方はパビリオン、一方は夫妻の墓へ至る。昇り、突き当たり、横を向き、真っすぐに進み、扉をくぐり、という動きが目地とPC板の配列によって表現されようとしている。薄暗い静かな空間にリズムが生み出される。入念なデザインが重なり合い、様々な建築的エピソードが生まれる。

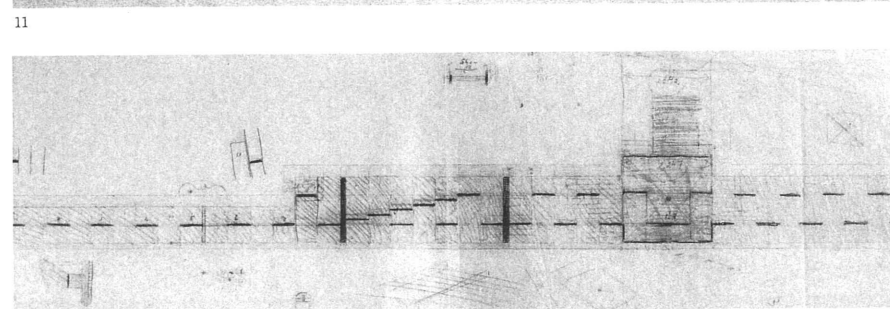


図13：入口棟の前門(プロパylon)の断面図。共同墓地からの入口となるので、隣接する墓廟とスケールやプロポーションを同等、同質のものにしようと努めている。事実、完成したのも背後の壁の前に独立して立っているように見える。何層にも重なる天井の構造。その間から漏れ落ちる光。そして二重円の開口部の共同墓地からの見え方もスタディされている。二重円は目を表す。それは近づく者を見据える。またそれを通して向こう側の風景を切り取って見せる。その風景はイタリアの草原(プラト)である。生命の源、五穀の母としての草原。生あるものすべてがそこに帰すことになる聖なる草原。下方にはプリオン家墓地に固有のマークの案。モチーフは四つ葉のクローバー、もしくは十字架か。このマークは家紋のように各所に用いられている。



図14：前門の立面、断面、平面。ほぼ実現案。どこの部分もジグザグの形状で埋め尽くされている。階段の蹴込みのところまでジグザグに繰り込んでいるのには驚かされる。ジグザグの効果は一律ではない。階段の場合は、繰り込みを作ることで段板が浮かんだように見え、歩を進めると単に高みに昇るというのではなく、何かの上を渡って行くという感覚を持たせるためであろう。

立面は対称性を保持しつつ、最も主要なプリオン夫妻の墓に至る左手への動きを重視しながら、それと均衡を取るために、上部においては右手への動きを作るなどの工夫がある。ジグザグを多用して、ボリュームの重量感を減らそうとしている。

断面は非常に細かく考えられている。階段の高さ、開口部の高さ、光の取り入れ方、上方への視線の通り方。またこの図からは、はっきりと独立した平面的な板を組み合わせることによる構成を強く志向していたことが分かる。

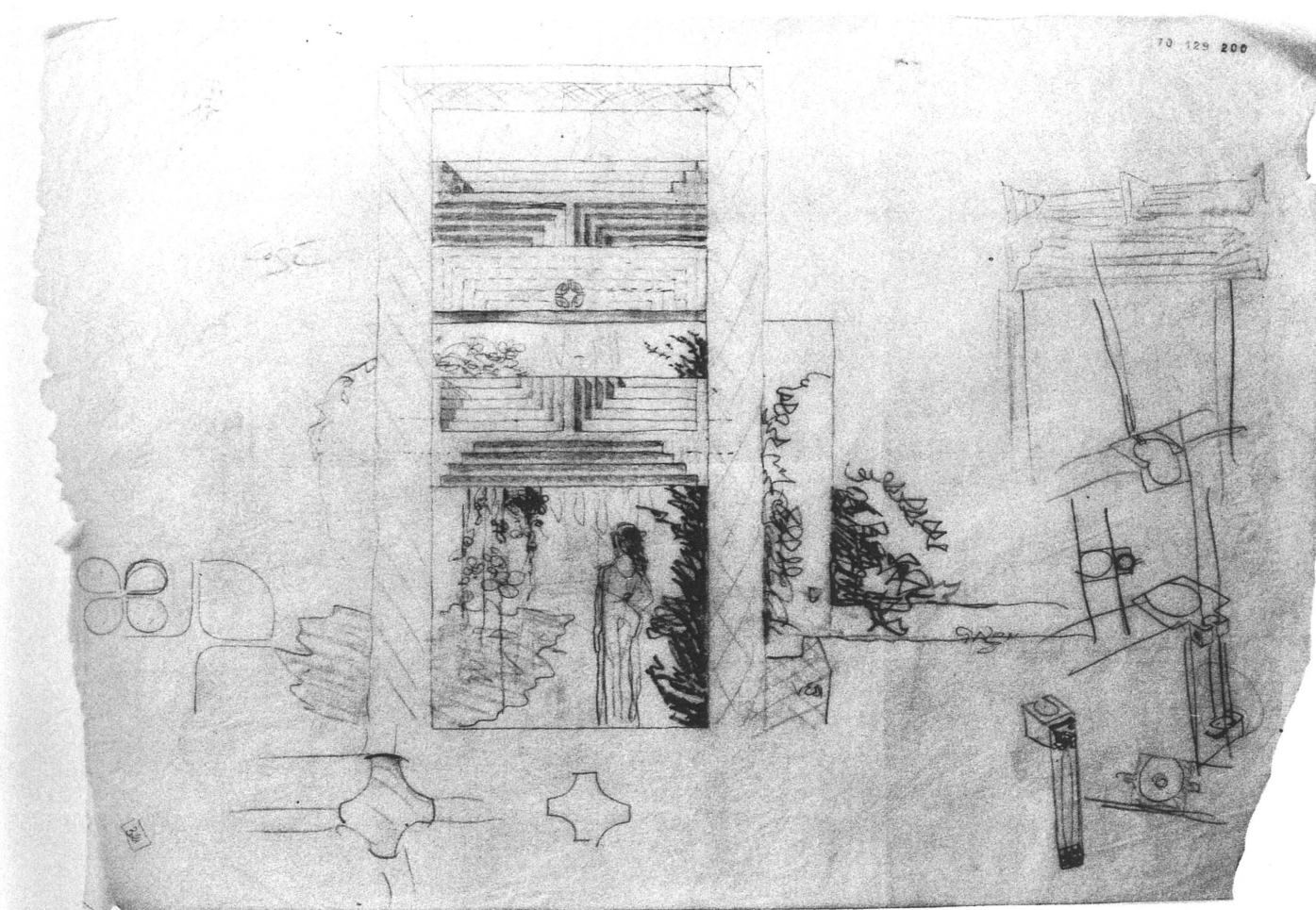
十字架(後に省かれた)を支える金具のディテールも検討されている。スカルパはスタディの途中で急に微細な納まり、金物のディテールなどに関心が移り、そこから抜け出せないことが間々あった。

11：東側ファサード  
East facade; perspective sketch  
Graphite pencil on tracing paper

12：床のスタディ  
Floor pattern drawing; the corridor of the entrance  
1:25  
Graphite pencil and color pencil on yellow tracing paper

13：前門の断面  
Section sketch; the entrance facing the municipal cemetery 1:25  
Graphite pencil and color pencil on tracing paper

14：立面、断面、平面図  
Elevation, section and plan; the entrance 1:25  
Graphite pencil and color pencil on blue print



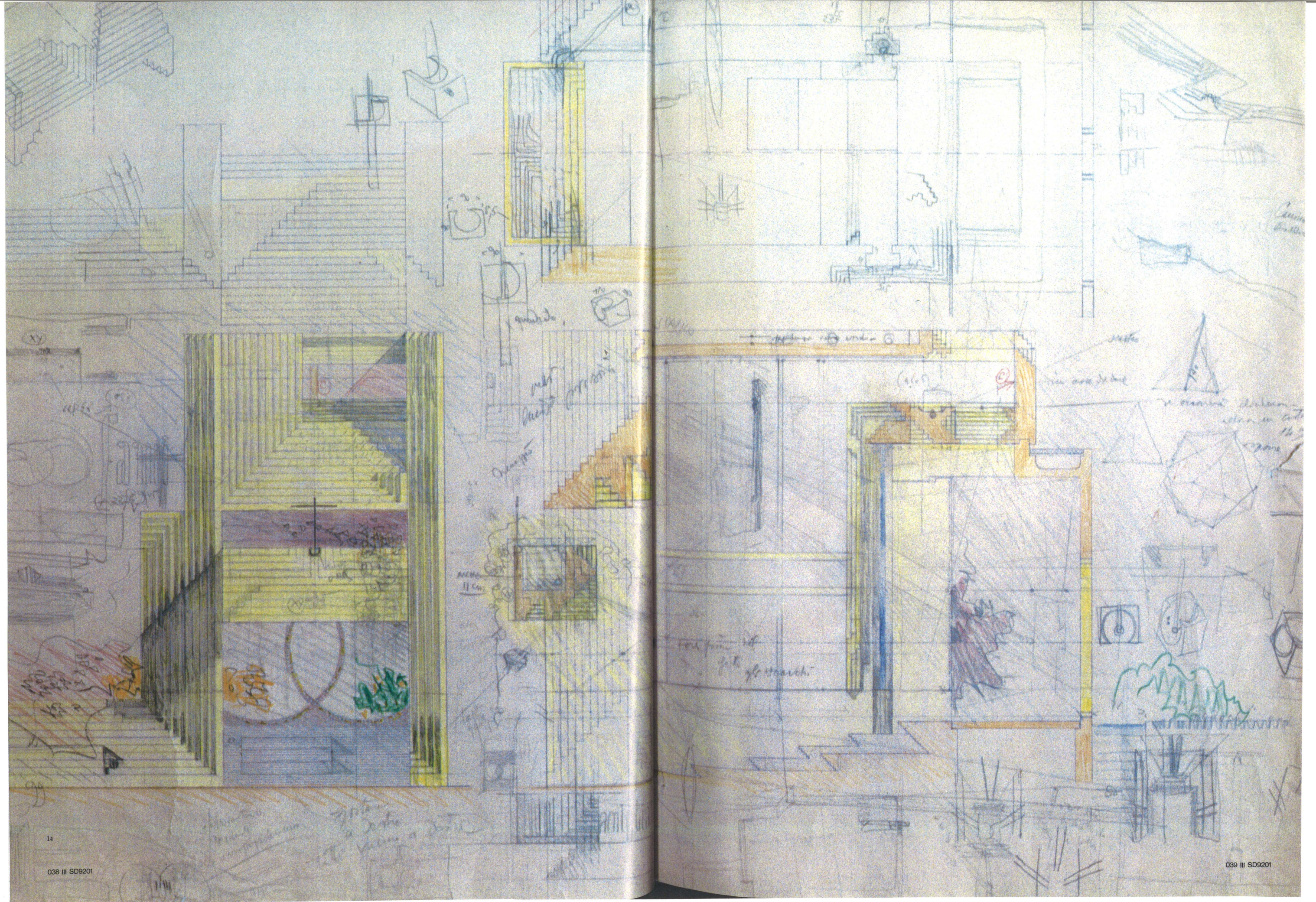
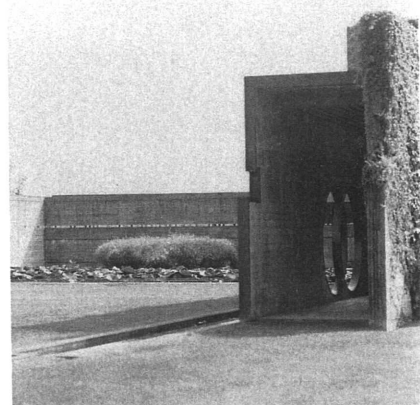


図15：入口棟のブリオン夫妻の墓側の端部を共同墓地側から見たアングル。共同墓地側に1枚の壁が立ち上がり、その背後にもう1枚の壁が立って、そこに通路の空間が生じ、端部はそれなりの処理が必要という考え方がこの図に明らかである。

図16、図17、図18：入口棟の廊下の途中、パビリオンへの通路に設けられた透明ガラス製の上げ下げ扉用の分銅は壁の反対側（外側）に設置され、一種の動く彫刻としてデザインの対象となっている。スカルパでなくても、ヨーロッパの建築家は伝統的に機械的なメカニズム、そしてそれらに用いられる歯車、ネジなどの部品を愛したが、スカルパもその点では人後に落ちなかった。

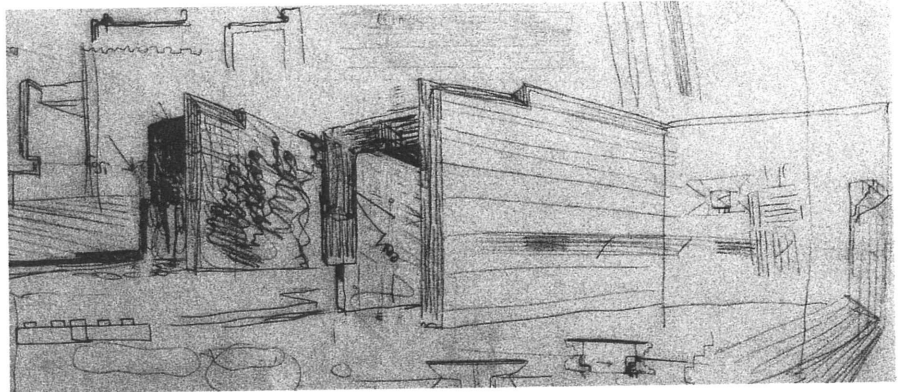
2本のワイヤーがそれぞれ扉の両端に引っ掛かり、引き上げられる。ワイヤーの何方所かをプーリーに引っかけてバランスを保っている。原理的にはワイヤーは左右対称でもよいはずだが、止まっているときも動いているときも、おもしろく見えるよう非対称な形をスタディしている。その微妙なアンバランスが視覚的な不安定さを誘う。



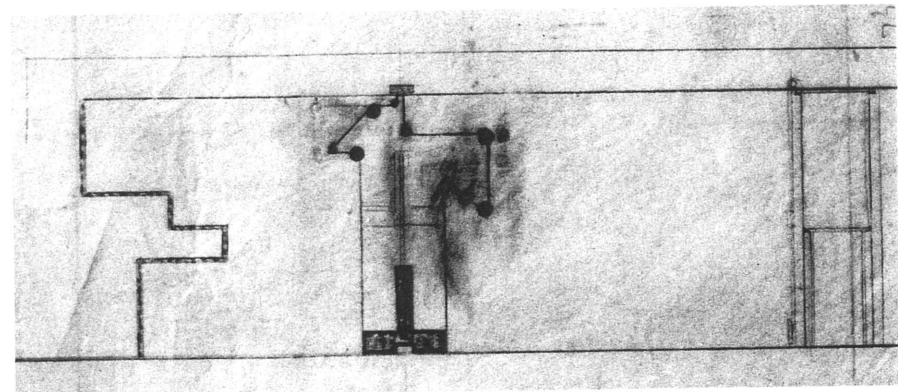
入口棟のブリオン夫妻の墓側出口



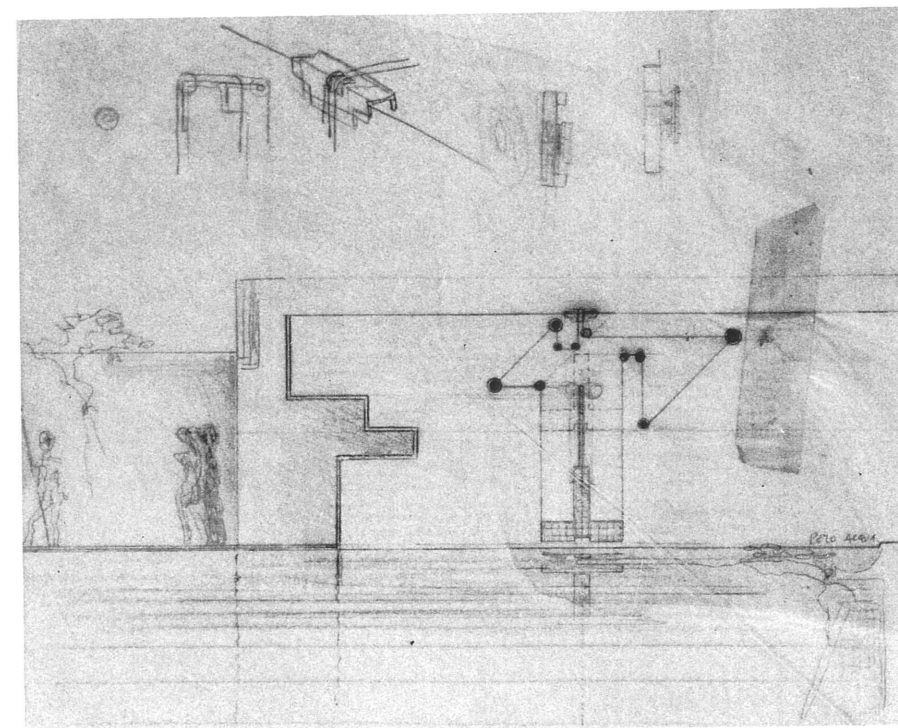
入口棟壁面の分銅



15

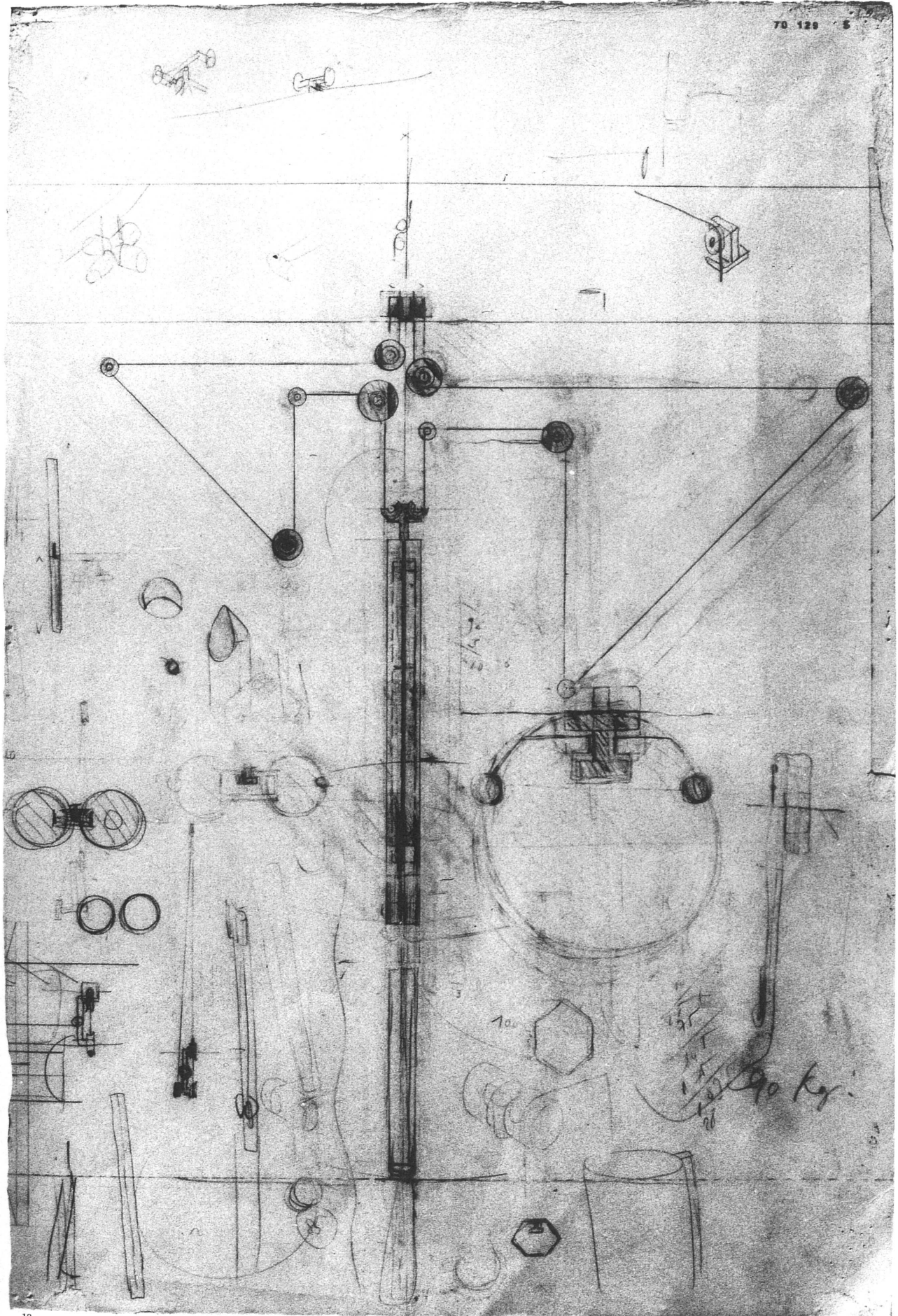


16

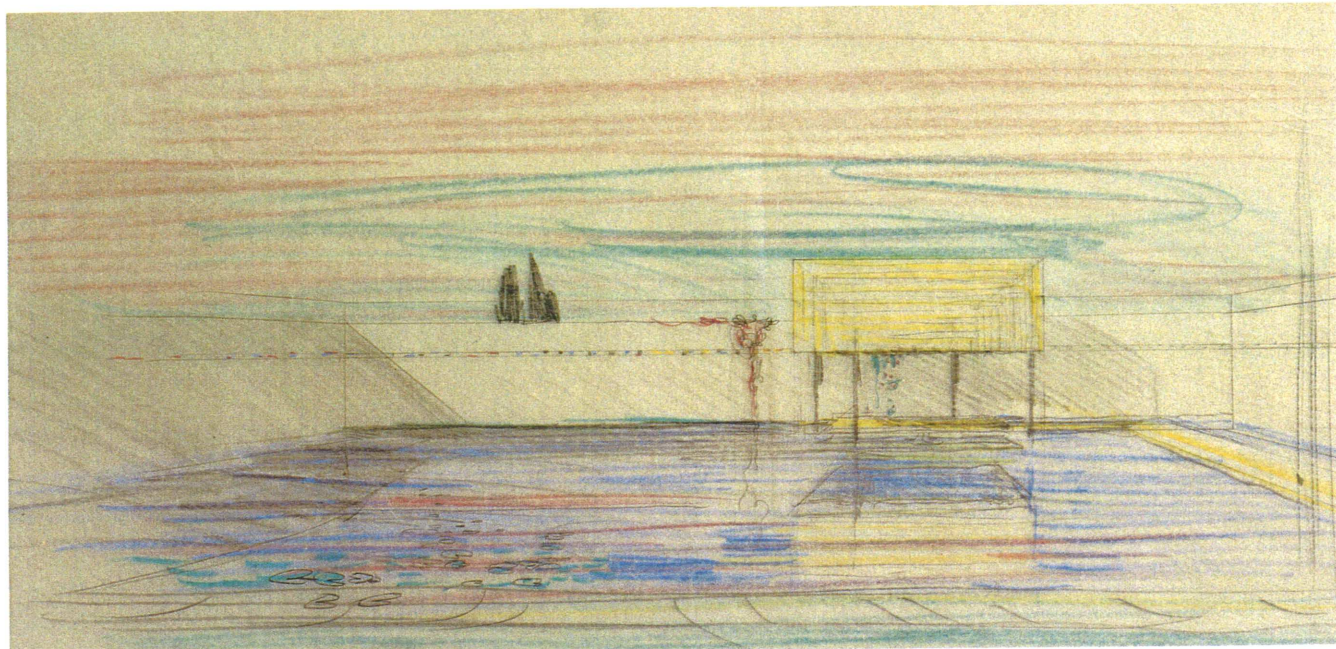


17

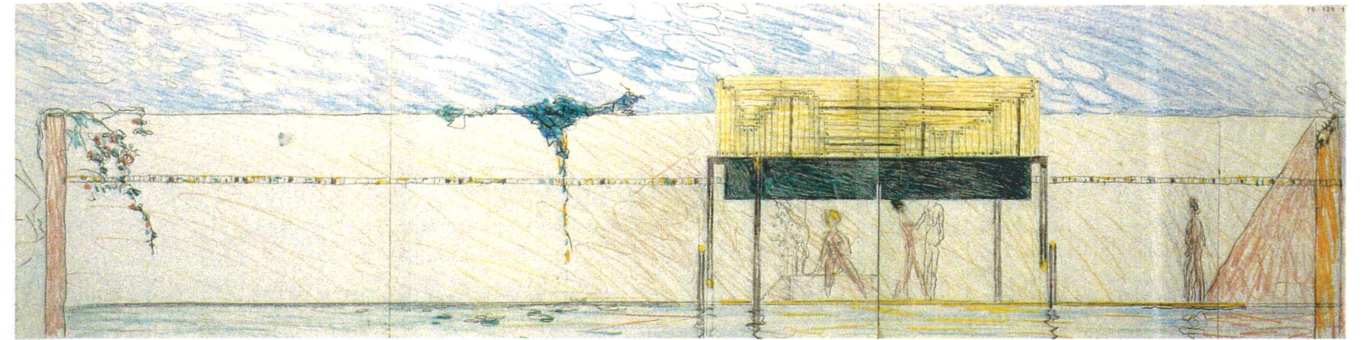
- 15：北側からのパース  
Perspective study sketches; north facade  
Graphite pencil on beige cartridge paper
- 16：上げ下げ扉用分銅システムのスケッチ  
Counterweight and pulley system for the sliding door  
Graphite pencil on tracing paper
- 17：分銅とプーリーのシステムのスケッチ  
Counterweight and pulley system for the sliding door  
Graphite pencil and color pencil on tracing paper
- 18：分銅とプーリーのシステムの図面  
Counterweight and pulley system for the sliding door  
Graphite pencil and color pencil on cartridge paper



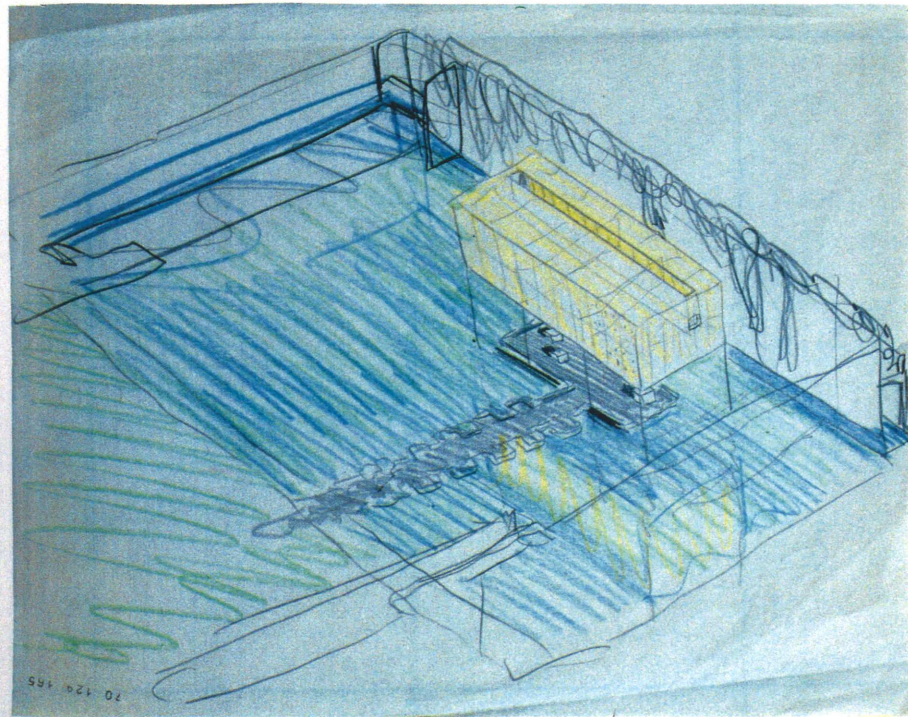
18



19



20



21

- 19: スケッチ  
Perspective drawing  
Graphite pencil and color pencil on tracing paper
- 20: 立面スケッチ  
Elevation sketch  
Graphite pencil and color pencil on typing paper
- 21: スケッチ  
Perspective drawing  
Graphite pencil and color pencil on typing paper

図19: 池とパビリオンの幻想的ですからあるスケッチ。やや彩度の落ちた3色の鉛筆で描かれている。睡蓮がある他には何もない大きな池と単純な形のパビリオンの組み合わせ。簡明でかつ美しい至高の情景。これ自体で完成しているように思えるが、当初考えていた手前の草原からパビリオンへと池を渡って行く通路をなくしたため、スカルパには池の面が空虚に感じられたのであろうか、実際にはこれを基に、アプローチの仕方、パビリオンの位置や形、天蓋の支柱の位置や構造、花壇や植え込みの形や配置や数など、延々とスタディが積み重ねられて行く。

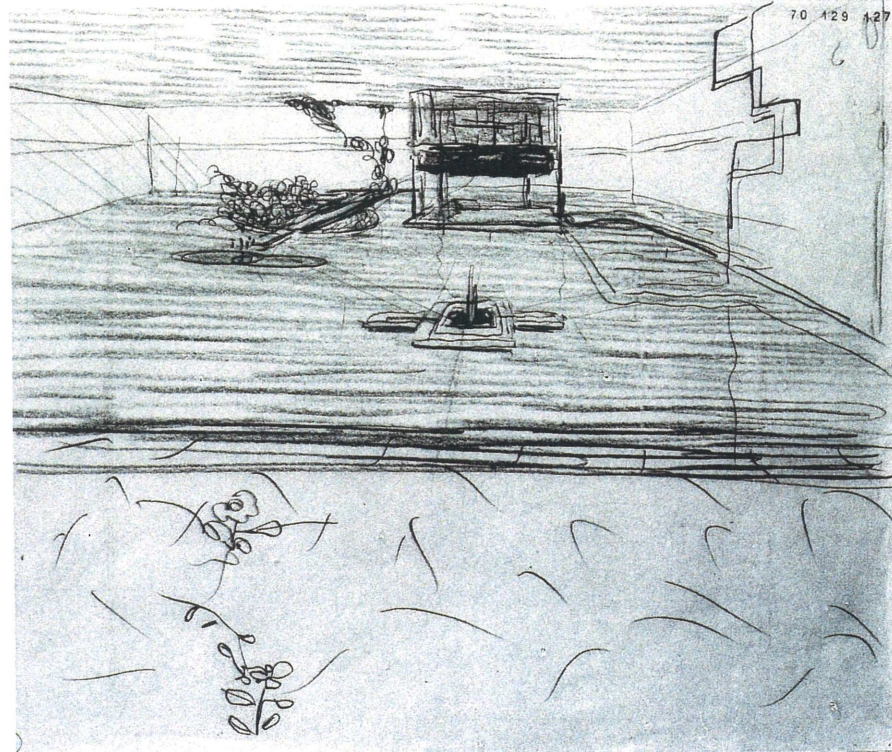


図20: 実現案に近い立面。パビリオンは、支柱、天蓋、その下の幕板とも詳細な検討の結果を示している。背後の壁面上を水平に走るモザイク、垂れ下がる植物、佇む人影、水面に反射する映像。スケールは控え目に押さえられ、あたかも茶室のごとし。すべてが瞑想のための空間にふさわしいセッティングである。「これは、私の作品の中で快くおもむける唯一のもので。ここは自然が美しく庭園のようであり、池の中のパビリオンは私のために造ったもので、瞑想のためにしばしばそこに向きます」。

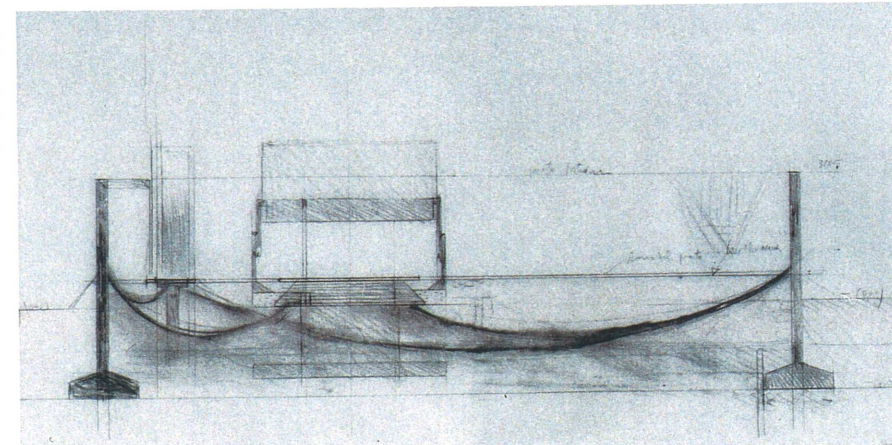


図21: 池とパビリオンの比較的初期の案。左手の緑の草原から池を渡ってパビリオンに行けるようになっている。その後、墓地のすべての部分が公開されることになったこともあって、ただひとつ瞑想のパビリオンだけが完全なプライベートな場所とされることになり、池を渡るアプローチは中止された。パビリオンの形も単純な長方形で、6本の支柱の位置もごく普通。天蓋上部のスリットは既にある。

図22: 池とパビリオンの実現案に近いスケッチ。池にはパビリオンの他に、その手前、左側に花壇や植え込みが配されている。それらはやや複雑な感を免れない。

図23: 池の断面。底面の検討。ヴェネツィアでは水の干満が大きく、それによって建築はまったく異なった表情を呈する。それゆえに、水面と建築の関係、水際のデザイン、水面や底面の形にはとりわけて配慮が必要となる。スカルパもこの図で、パビリオンがきれいに浮かんで見えるように、池の底面の形を考えている。現状では水際を除いて底面は平らで、睡蓮が茂り、水面下の造形はほとんど見えない。

図24: 池の平面。池の中に配置したい幾つかの要素をスケッチしている。ここでも再び二重門のモチーフが花壇として現れている。その前後に正方形、長方形の花壇、植え込みがあり、それらはパビリオンの左手に一直線に並んでいる。池というよりは、水の庭園といった趣。

22: スケッチ  
Perspective sketch  
Graphite pencil and color pencil on stationery  
23: 断面スケッチ  
Section 1:50  
Graphite pencil and color pencil on yellow tracing paper  
24: 池の平面スケッチ  
Large pool layout; floating flower boxes  
Graphite pencil and color pencil on tracing paper

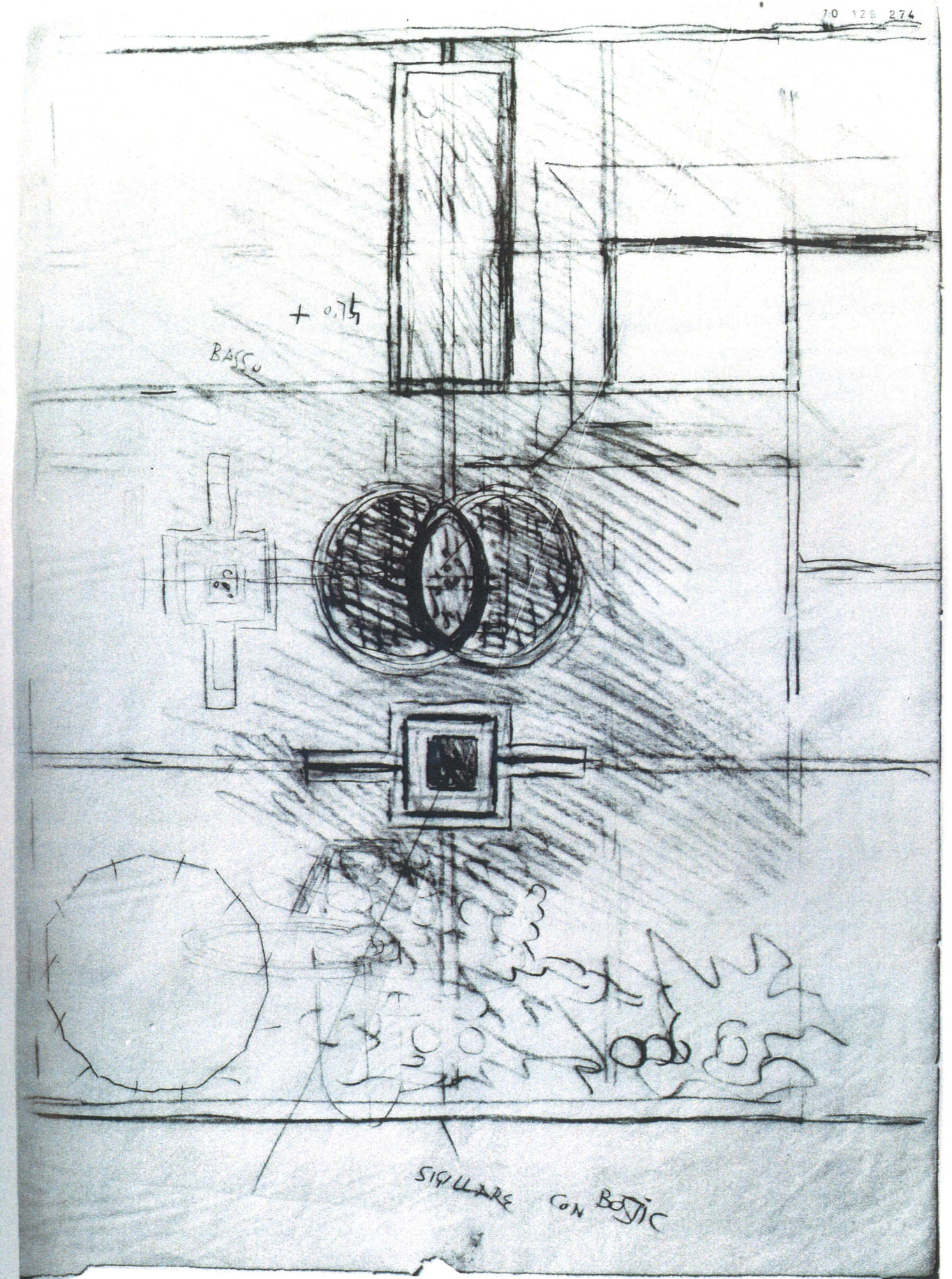


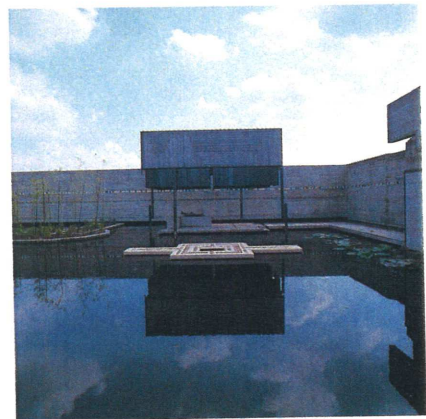
図25：異常なほど荒々しいタッチで描かれたパビリオンの図。試行錯誤を繰り返す中で、進路に確信を得た瞬間がここに定着されている。図の全体にほとばしる力が、ついに求めるものを見いだしたという喜びと、これを実現させるのだという強い意志を感じさせて余りある。

図26：パビリオンの入口側の立面。プリオン家墓地の数多い図の中でも、繊細な美しさではこれに優るものはない。構成部材のすべてを非常に明瞭に分節化しようとする意識が読み取れる。微細な寸法の精妙なコントロール。

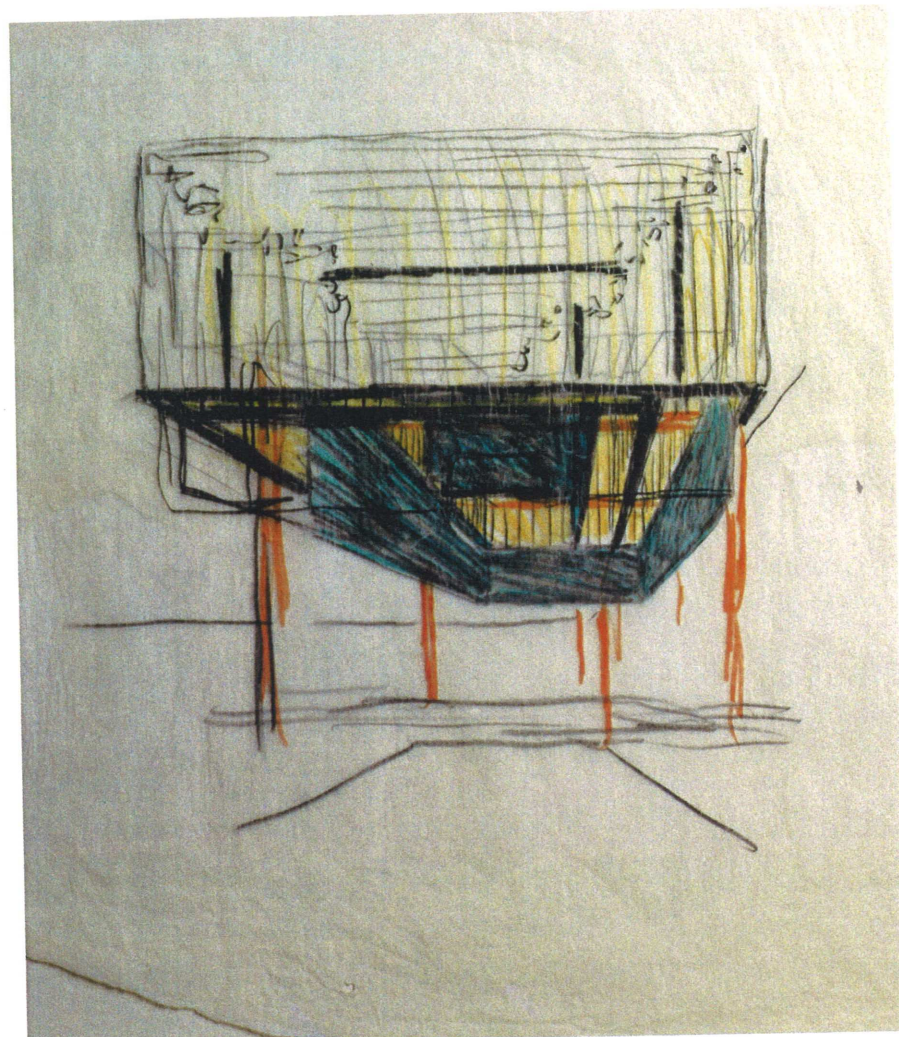
図27：パビリオンのスケッチ。平面、立面、ディテール、断面などが集中的に描かれている。池の底面の複雑なカーブ。4本1組となっている支柱の原寸の検討。

光の水面や壁面への落ち方、そして上方への視線の通り方がスタディされている。さらには共同墓地側から覗越しにパビリオンがどう見えるかも研究している。彼は共同墓地を尊重し、いつもそこからの視線を考えていたことが知られる。プリオン家の墓地と共同墓地が一体となったランドスケープを模索していたのである。

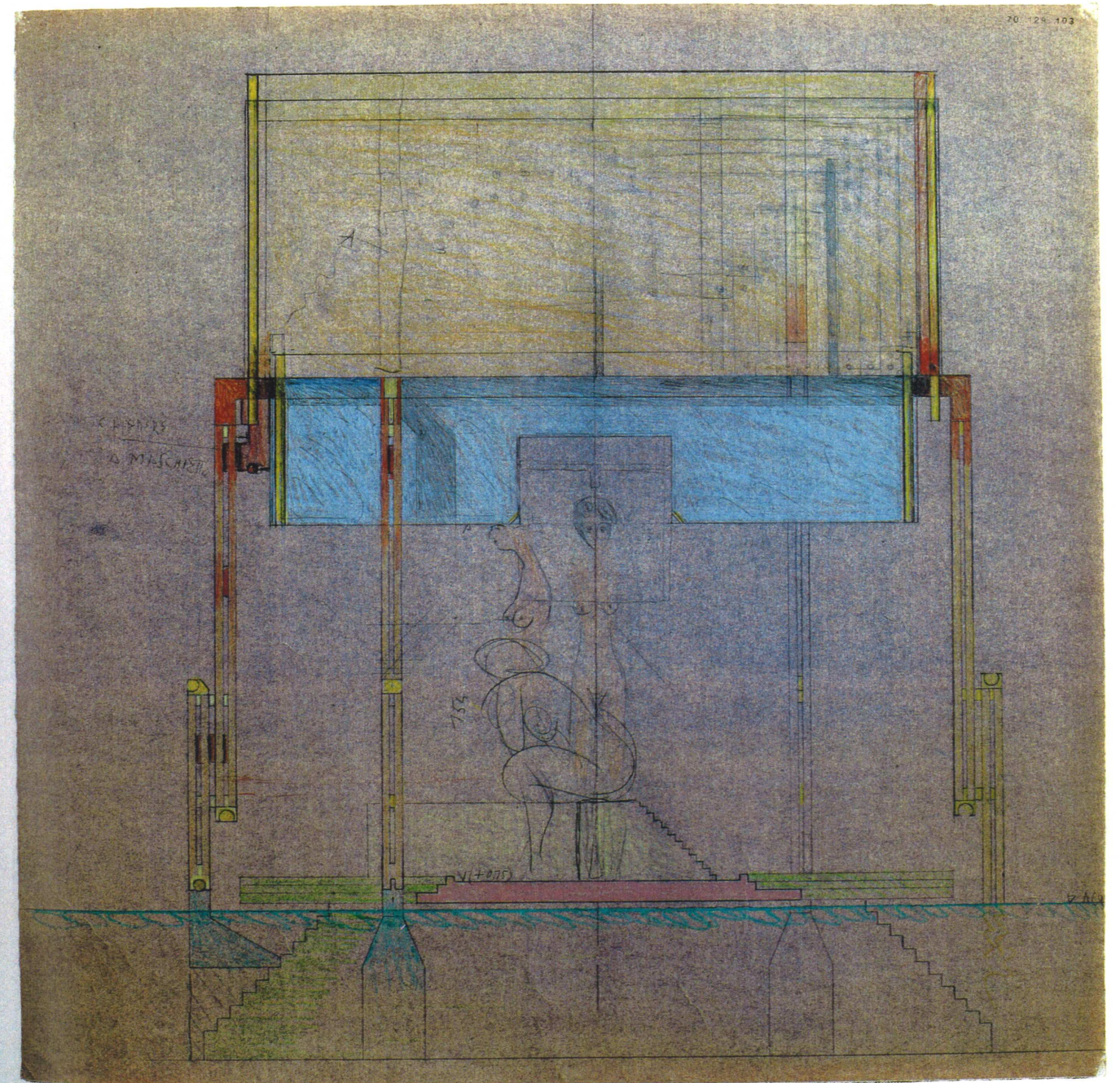
図28：パビリオンの実施案。水面下の部分もジグザグの形を使って丁寧にデザインしている。



池に浮かぶパビリオン



25



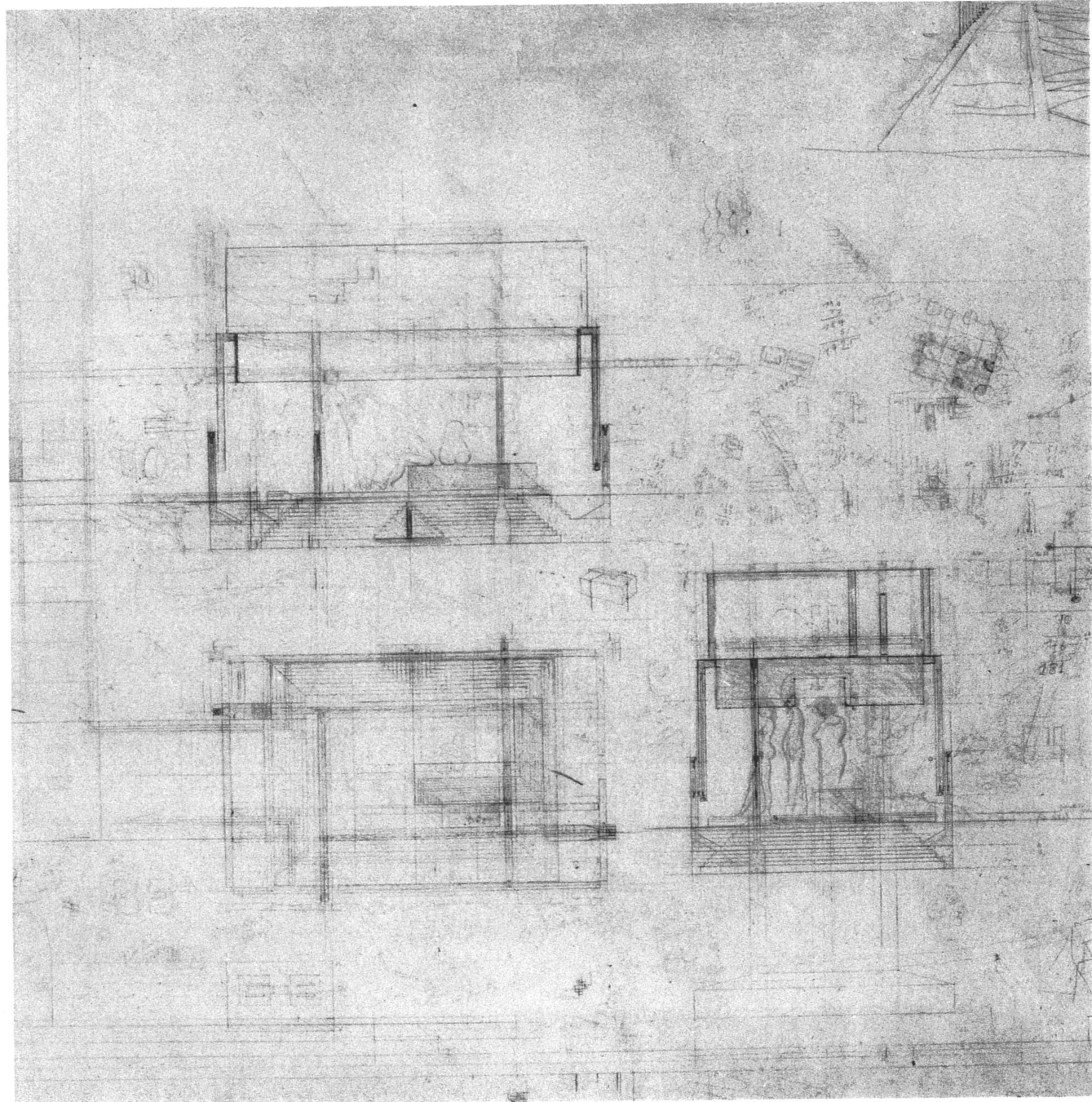
26

25：スケッチ  
Perspective sketch  
Color pencil on tracing paper  
26：西立面図  
West elevation  
Graphite pencil and color pencil on blue print

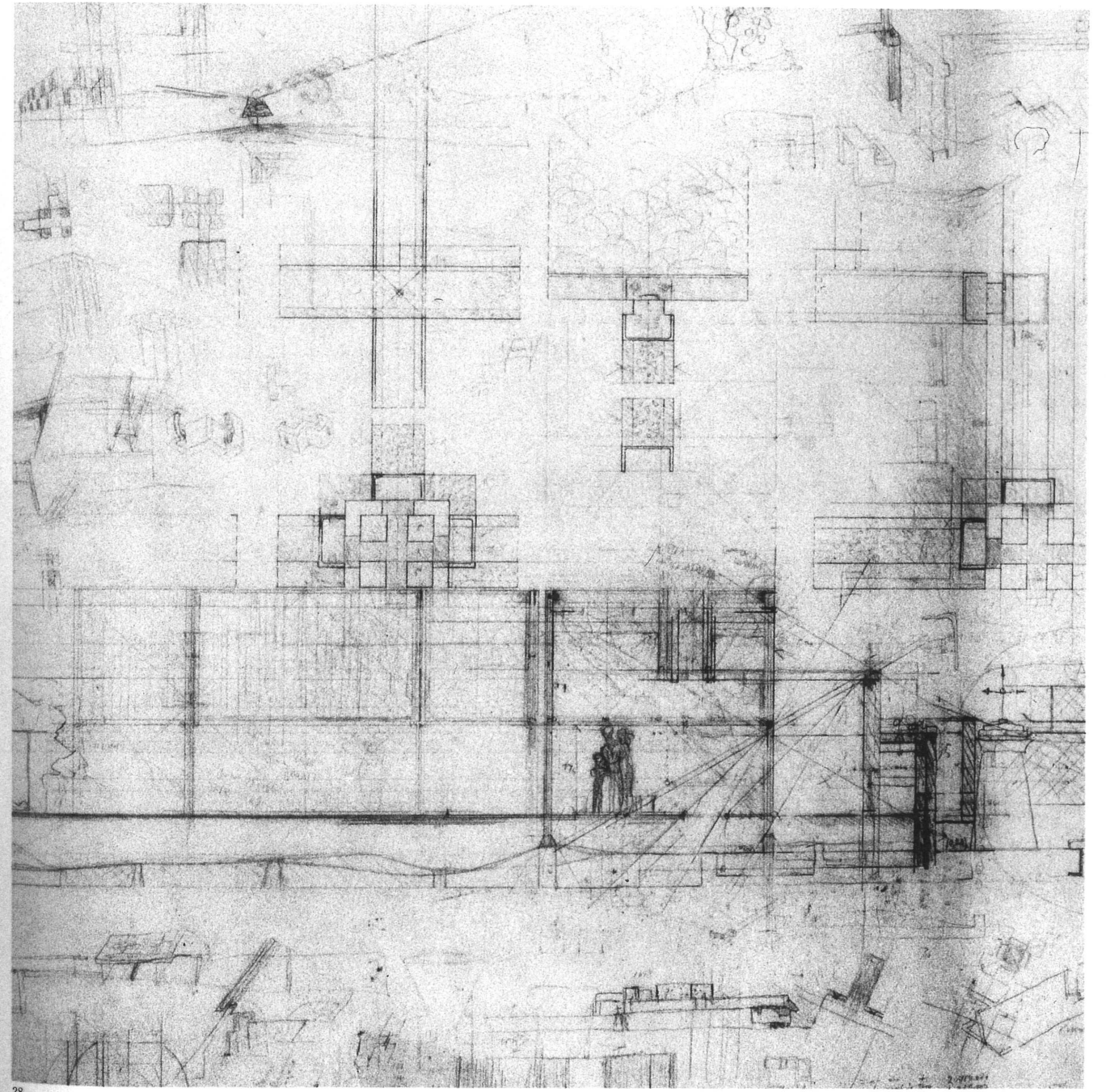


27: パビリオン立面、断面図  
Elevation and section 1:50  
Graphite pencil and color pencil on beige cartridge paper

28: パビリオン平面、立面、断面図  
Plan, elevation, section and detail of structure  
1:50 1:5  
Graphite pencil on beige cartridge paper



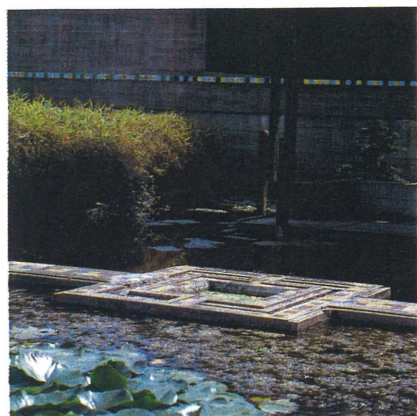
27



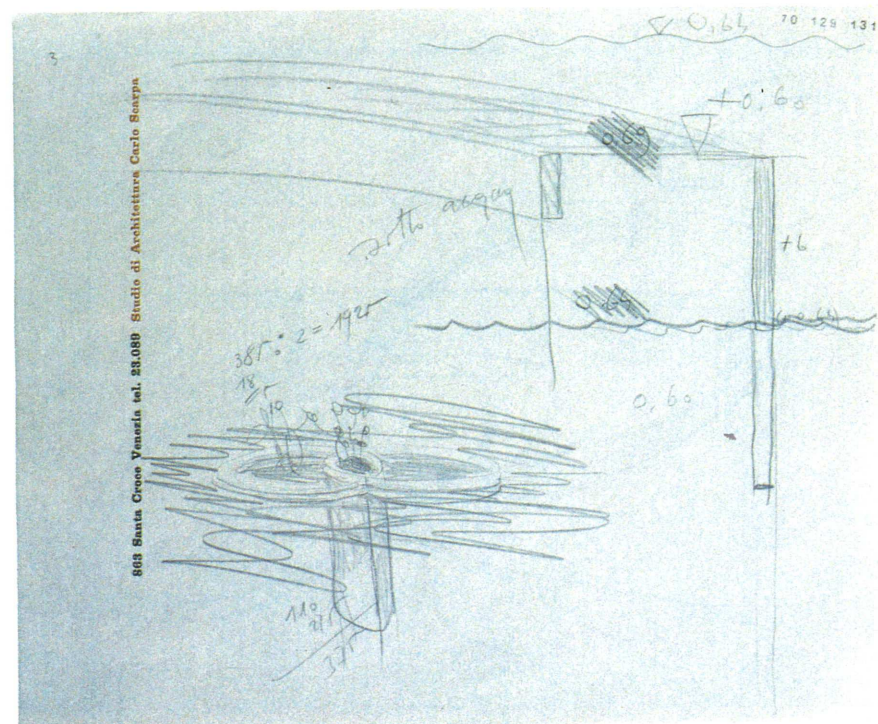
28

図29：花壇のスケッチ。二重円のモチーフ。水面下のデザインも重要視して、全体の姿は花瓶のように見える。最後には放棄された。

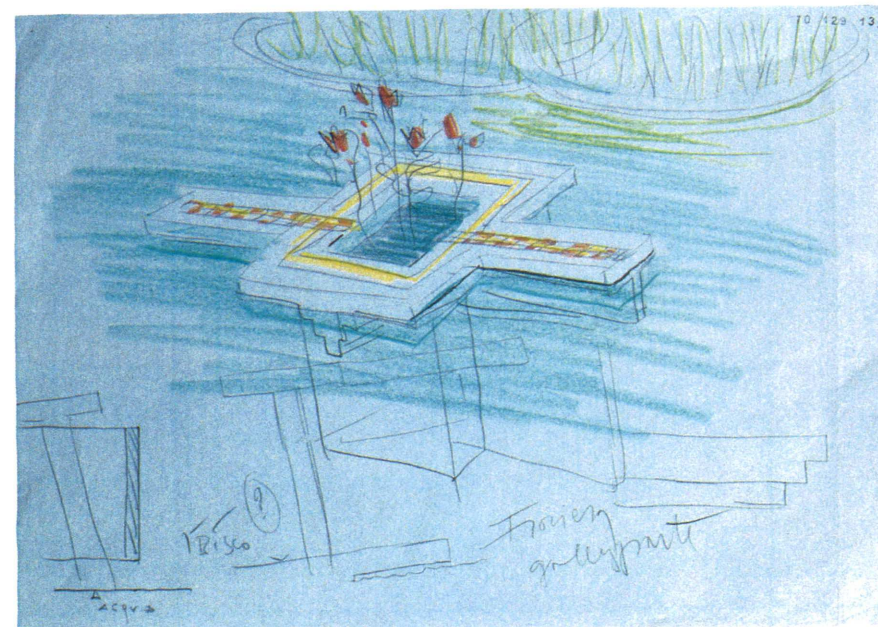
図30：両側に腕を伸ばした正方形の平面を持った花壇。ほぼ同じデザインで噴水とする案もあった。



池に浮かぶ正方形平面の花壇

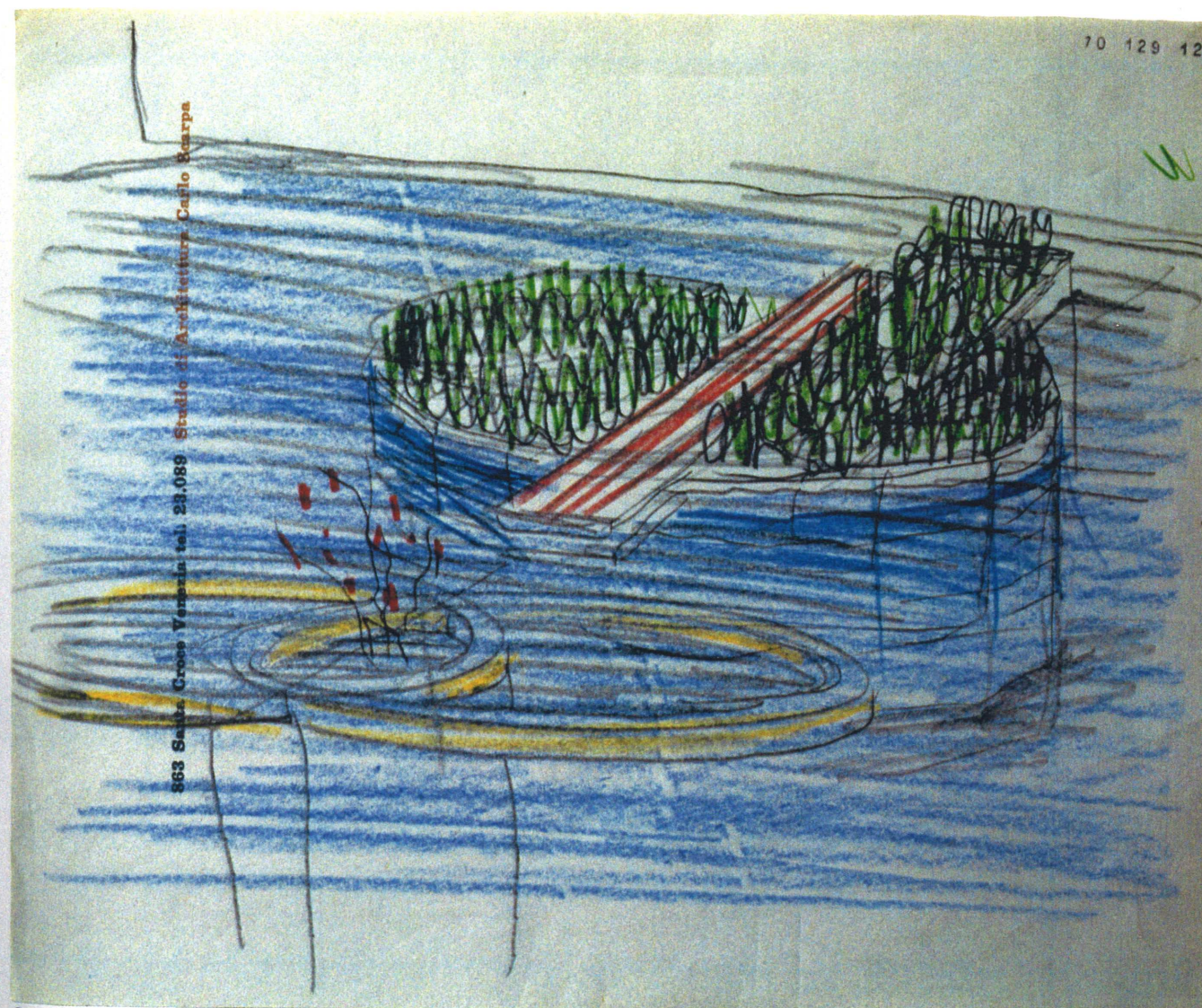


29



30

- 29：二重円のモチーフ  
Two rings; floating flower box  
Graphite pencil on stationery
- 30：正方形のモチーフ  
Floating flower box  
Graphite pencil and color pencil on typing paper
- 31：花壇と植え込み  
Two rings and bamboo island  
Graphite pencil and color pencil on stationery

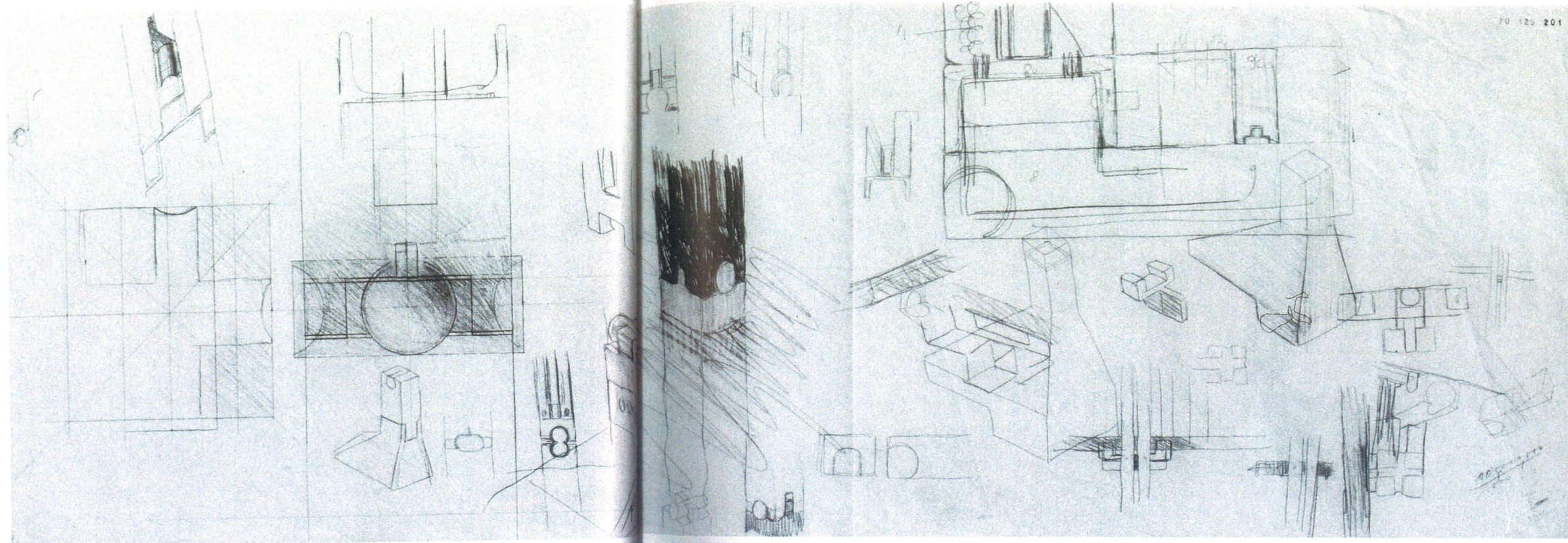


31

図32：支柱の金物、ことに台座の部分の検討。実現しなかった4本1組の柱の案。こうした金属加工はヴェネツィアのザノンという工房ですべて行われた。旋盤とドリルとフライス盤という基本的な機械のみを用いて、それのできる範囲の加工が熟練した職人の手でなされた。溶接を嫌い、専らネジによる接合が採られた。ネジ穴とネジの種類を変えることにより様々な装飾的效果が出された。素材は鉄または黄銅が主であった。

またこの工房の裏側にはアンフォディロという木工工房がある。何代も続いているところで、60人ほどの職人を抱え、パラッツォ・ドゥ・カレの改修とか、家具の製作も行う。スカルパが好んだ木工と金具の組み合わせは、この隣同士の工房を歩きまわることによって簡単にできてしまった。長年の仕事によって互いの意志の疎通も僅かなスケッチによって可能であったのである。

スカルパの空間にとって欠かせぬスタッコ、金具、木工、そして大理石などの加工は、すべて当時の、そして今なお活動を続けるヴェネツィア在住の職人だけでできるようになっている。スカルパの指揮棒のもとに糸乱れずに動く職人集団の存在が、彼の精緻な細部をしっかりと支えていたのである。いずれにしても彼は終生、手の届く範囲の素材と技術で、ヴェネツィア周辺の地方性の枠の中で建築を作り続けたのである。



32：支柱のディテール・スケッチ  
Detail sketch; bottom of pilaster  
Graphite pencil and color pencil on tracing paper

33：支柱のスケッチ  
Study sketch; pilaster  
Graphite pencil and color pencil on tracing paper

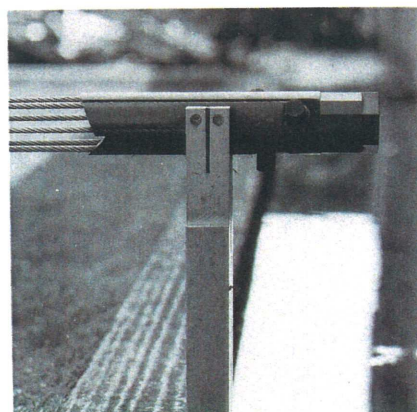
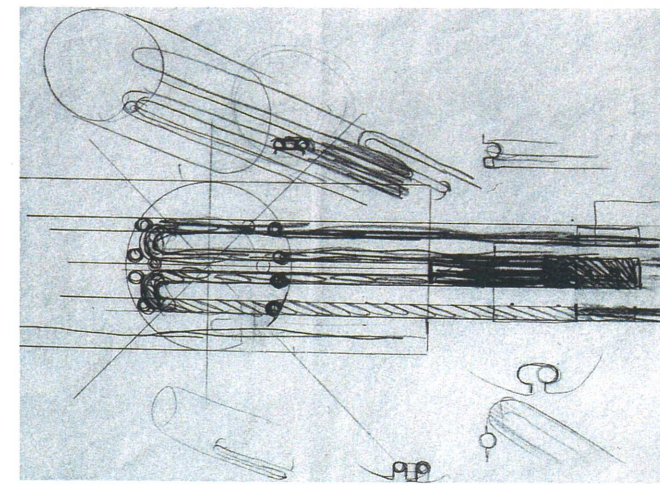
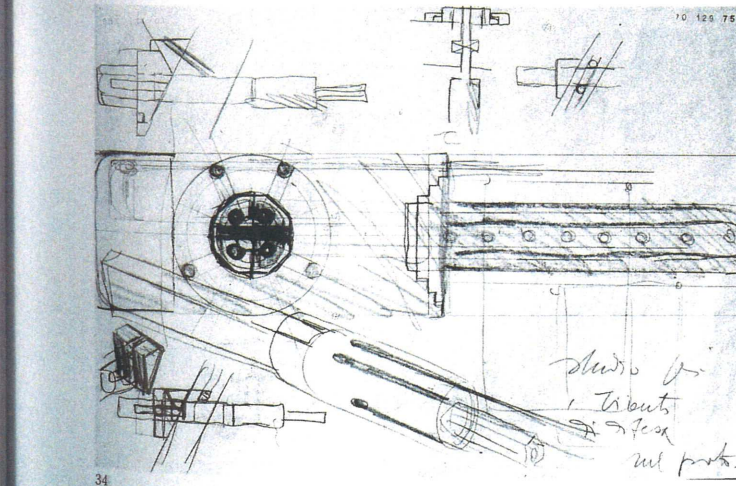
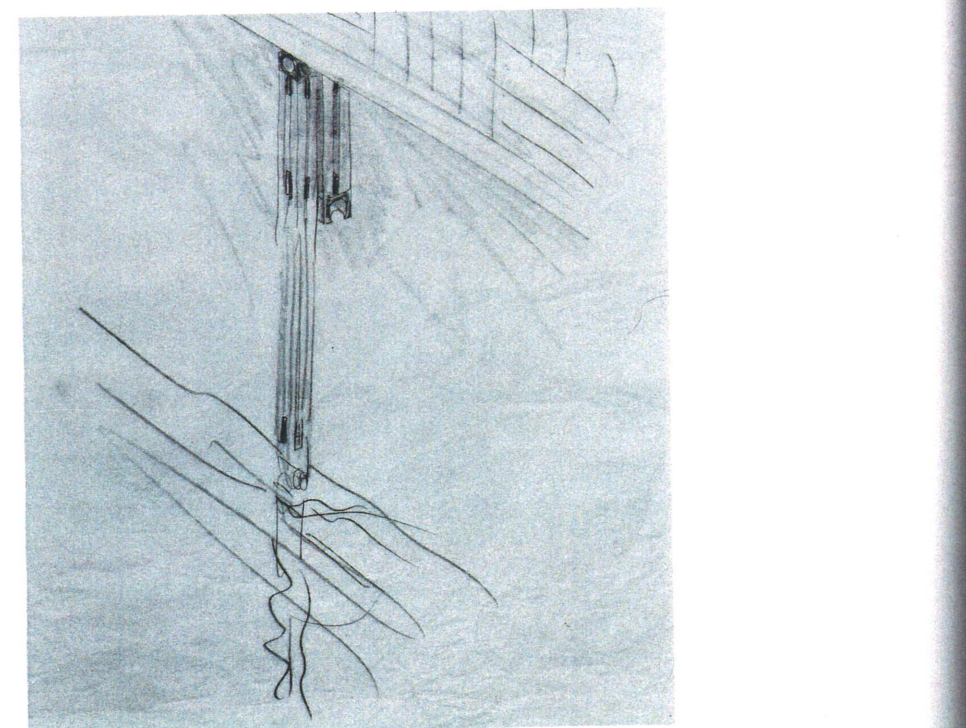
34：ケーブル端部ディテール  
Detail drawing; cable barrier across lawn  
Graphite pencil and color pencil on typing paper

35：ケーブル端部ディテール  
Detail drawing; cable barrier across lawn  
Graphite pencil on typing paper

図33：パビリオンの天蓋の支柱。水に映る姿。



図34、図35：ブリオン夫妻の墓のある草原とパビリオンのゾーンとを仕切るケーブル。その先端部のディテール。ケーブルを1本ずつ締めるとどこかに弛みがでるのは避けられないので、1本のケーブルを端部で折り返して4本にしている。その高さは地上から約30cmのところから張られている。それは物理的な障害としてではなく、心理的な結界として設けられている。アルディラ（彼岸）の表現。



ケーブル端部金物

33